教育関連記事

エデュサン edu sun

3

2025 / No.114

卒業式を迎えたニューヨーク日本人学校中等部の生徒（ニューヨーク日本人学校）

発行／ DAILYSUN NEW YORK LLC　1270 Avenue of the Americas, 7th Floor, New York, NY 10020
TEL：646-327-6443　WEB：www.dailysunny.com　E-MAIL：info@dailysunny.com

edu sun INDEX

1. 教育レポート

◆「お店やさん」活動を通じ言葉を学ぶ　NY 育英サタデースクール・マンハッタン校

◆ダブルダッチチームが表彰　NY 育英学園アフタースクール部門

◆第 26 回卒業証書授与式を合同で開催　卒業生が答辞で伝えたこと　NY 補習授業校

◆大きく羽ばたけ！卒業証書授与式を挙行　NY 日本人学校

◆体感！実感！はらぺこあおむし　NY 育英学園フレンズアカデミーたんぽぽ幼稚園

◆ひな祭りで笑顔弾ける　NY 育英学園フレンズアカデミー保育支援広場「ぽっぽ」

◆涙涙の小学部卒業式　NY 育英学園全日制小学部

2. NY 教育関連ニュース

◆ NY 市公立校生徒、3 分の 1 以上が不登校　バッファローでは 62%が常習的に欠席

◆学生ローンの行方に混乱と不安　教育省廃止へ大統領令署名

◆ハーバード大学、経済的支援拡大　中流家庭の学生も授業料無料の対象に以上

◆コロンビア大、政権側に譲歩　助成金 4 億ドルの凍結解除を求め

◆トランプ政権の介入　アメリカの「知」揺るがす脅威に

◆デイケア利用補助バウチャー消滅か　追加資金 10 億ドルが必要

◆「計画や目標は常にビジュアル化、とにかくやってみる」ニューヨークで活躍する女性起業家・徳重真梨子さん × 日本の高校生が対談

エデュサン
edu sun

1. 教育レポート

EDUCATION REPORT

「お店やさん」活動を通じ言葉を学ぶ

NY 育英サタデースクール・マンハッタン校

3/3/2025

育英サタデースクール・マンハッタン校(牧野佳代子ディレクター)の小学部1、2年生は2月8日、生活科の授業で「お店やさん」活動を行った。小学1年生の国語科「ものの名前」単元を応用し、言葉の分類を体験的に学ぶことが目的。生活科は小学3年生からは理科と社会につながるため、日本の社会を体感することを目的に毎週学習している。

「ものの名前」の単元では、名称の階層構造について理解を深めることを主眼とし、「くだもの」という包括的なカテゴリーと「みかん」「りんご」「バナナ」といった個別名称の関係性を応用し、「〇〇屋さん」として大分類を設定。そこに属する個々の商品を子ども自身が決定する形で学習を展開した。子どもたちは自作商品の販売と店の運営の体験を通して言葉の仕組みを楽しく学んだ。

当日は上級生（小学2年生や中学生、高校生ボランティア）や職員が買い物客として参加。学年間で交流し、「お店やさん」は大盛況に終わった。小学1年生たちは達成感を味わいながら、笑顔あふれるひとときを過ごした。（情報・写真提供：ニューヨーク育英サタデースクール・マンハッタン校）

お客さんは小2と中学生
「おいくらですか？」

お菓子屋さんになって「いらっしゃーい」
と声をかける小1の子どもたち

ダブルダッチチームが表彰

NY 育英学園アフタースクール部門

3/3/2025

ニュージャージー州イングルウッドクリフスの郡評議会室で 2 月 12 日、ニューヨーク育英学園アフタースクール部門（中村信乃ディレクター）のダブルダッチチームが表彰された。表彰式には市長をはじめ関係者が多数出席。マーク・パク郡長自らが子どもたちと写真を撮るなど、和やかな雰囲気の中で進行した。

ダブルダッチは瞬発力や持久力、チームワークを養えるため、幼児や小学生の成長期に最適なスポーツとして人気が高い。同学園のダブルダッチチームを指導するのは、日本体育大学在学中に「ダブルダッチ世界王者」となった笠間将平さん。市長は、ダブルダッチの国際大会「Holiday Classics」での入賞を称えつつ、スポーツとしてのダブルダッチの魅力や教育的価値に言及。ロープを回す人と跳ぶ人が息を合わせることで生まれるチームワークの大切さや、多彩な技・表現を取り入れられる創造性が、子どもたちの成長に大きく寄与する点を強調した。加えて、今回の快挙が地域にもたらす波及効果や、今後の競技発展への期待も述べた。

笠間さんは「子どもたちの日頃の練習の成果をこうして評価していただき、とても光栄です。これからも指導に力を入れ、地域や学校と連携しながらダブルダッチの魅力を広めていきたい」と話した。表彰式を通じて、ダブルダッチの魅力と、子どもたちのひたむきな頑張りが改めて多くの人々に伝わったようだ。

ニューヨーク育英学園のダブルダッチチームは他学校の子どもも参加可能。毎週月、火、土曜に活動している。問い合わせは doubeldutch.nyikuei@gmail.com 笠間さんまで。（情報・写真提供：NY 育英学園アフタースクール部門）

表彰式に出席したダブルダッチチームのメンバー。素敵な笑顔ですネ

賞状を手に記念撮影。後列はコーチの笠間さん（左から 3 人目）、岡本園長、パク郡長

第 26 回卒業証書授与式を合同で開催

卒業生が答辞で伝えたこと　NY 補習授業校

3/27/2025

ニューヨーク補習授業校（小島昇校長）は 16 日、LI 校・W 校合同の第 26 回卒業証書授与式を挙行した。初等部、中等部、高等部の各課程を修了した合計 80 人の卒業生が、小島校長から卒業証書を受け取った。

卒業生代表の 6 人による答辞は、さまざまな困難に直面しながらも補習校で学び続けたことで得られた自信に満ちあふれていた。補習校で共に学んだ仲間と育んだ絆、支えてくれた保護者への感謝、卒業の日を迎えた達成感、将来への決意と希望が丁寧な日本語で述べられ、式場からは大きな拍手が沸き起こった。

LI 校初等部代表児童、W 校中等部代表生徒の卒業生答辞を紹介する（情報・写真提供：ニューヨーク補習授業校）。

編集部註：答辞は原文のまま掲載しています

W校高等部の卒業生

LI 校高等部の卒業生

答辞
卒業生代表・LI 校初等部 6 年　藤本真矢

みなさま、本日は私たち卒業生のために、このような素晴らしい卒業式を開いていただき、また、たくさんのお祝いの言葉もいただきまして、ありがとうございます。

補習校の初等部に入学してからの六年間は、私にとってとても長い時間でした。その間、私はたくさんのことを学びました。けれど、私は、日本語や漢字だけを教えてもらったのではありません。私は、友達とはどういうものか、そして、大変だった漢字の勉強が自分への自信につながる、ということも学びました。

一年生に入学した時は、私はとてもシャイだったことを覚えています。だれかと話すとき、ものすごくきんちょうしました。でも、クラスメイトたちにやさしくかんげいされて、仲良くなりました。そして、クラス全員でカフェテリアで宿題をやったり、文句を言いながらも、授業で協力し合ったり、困っているときや悲しいときも、みんなで助け合いました。

運動会の時、クラスが白組と紅組に分かれて反対のチームになってしまった時だって、公園で一緒に練習して、どうやってリレーに勝てるかのヒントを語り合いました。勝ち負けより、助け合うことを選んだことが、とてもうれしく感じられました。

また、授業中にいたずらをしたり、おしゃべりをしたりした時でも、みんなで責任を取って、一緒におこられました。でも、だれも個人を責めたりしませんでした。　今となっては、クラス全員のきずなを深めた大切な思い出です。補習校からもらった一番大切なものは、信頼できる友達が作れたことだと言っても過言ではありません。六年一組のみんなは、私にとってとても大事な友達です。

補習校で一番大変だったのは、宿題です。現地校の宿題と両立するのはしんどかったし、漢字の勉強は大変でした。おこられながらも、毎日母と一緒に、漢字テストの勉強をしました。でも、今は母に言われなくても、一人で勉強できるようになり、それが自分だけでもできるという自信に変わり、この勉強する習慣が私の生活の一部になりました。今なら、分かります。この大変だった時間は、日本語だけでなく、様々なことを学ぶために必要だったのだと。

四月、私は中学生になります。これからも、もっと補習校で勉強し、バイリンガルのアートセラピストになれることを目指して、たくさんのことに挑戦していきたいと思います。

最後になりますが、今日まで補習校を続けてこられたのは、これまで指導してくださった六年一組の豊田先生、ならびに、校長先生、教頭先生、これまで指導してくださった先生方、バーンズ先生、スタッフの方々のおかげです。心からお礼を申し上げます。そして、学校行事を支えて下さった保護者会とボランティアをして下さった保護者のみなさま、本当に有難うございましたそれから、お父さんとお母さん、今まで私を支えてくれてありがとう。これからも、応援してくださいね。

私たち卒業生の補習校生活を支援してくださった全ての方々に、心から感謝を申し上げ、これを答辞といたします。

本当にありがとうございました。

答辞
卒業生代表・W校中等部３年　クラベル・ビクトリア

私の母方の祖母は日本人です。でも私の母は日本語にはあまり馴染みが無く家庭での会話は全て英語で成り立っています。私の家族は父の仕事の都合で３歳から７歳までを日本で過ごし、アメリカへ帰国後はカリフォルニアのサンノゼ補習校に通いました。その後小学三年生の２学期にニューヨークの補習校に転校し今日に至ります。強いて言うなら私は逆帰国子女です。

私にとって、この中等部での３年間は、まさに「光陰矢の如し」。中等部に入学したことがつい昨日のことのように感じられます。

我が学級は生徒数 19 人での出発、とてもにぎやかで活気に満ちあふれていました。

ところが、中二が始まるころより、帰国や転出が増え人数が減りだし、クラスの規模がだんだん小さくなってきました。最終的に今日共に中等部を卒業する級友は７人になってしまいました。しかし私達にとって、このクラスはかけがえのない仲間達で成り立っています！　私たちは週に一回しか会えませんが、現地校とは違い三年間ずっと同じ顔ぶれです。長い時間をかけてどんどん仲良くなっていくことができたのがとてもうれしかったです。

私たちのクラスのテーマは「十人十色」。一人ひとり個性は違うけれどそれぞれの良さを認め合って、自分らしさが輝くクラスを目指してきました。

補習校最大の行事「のみの市」では、この少人数でイベントを行うのはとても困難でした。雑貨、食べ物、ゲームなどを準備し、初等部の皆さんや一般の方々にそれらを紹介、購入をお願いしました。昨年と同じメンバーだからこそ、昨年の反省を生かして作戦を練ることが出来ました。

当日は食事をする時間を割いて、気恥ずかしさをおぼえながらも積極的に会場以外の教室へも、出張販売に行きました。全員で協力し準備してきたベークセールでの商品を全部売り切ったときは皆、達成感に満たされ、私自身がとても感動しました。クラスの人数が一番少なくても、こんなことができるんだ、たった７人で乗り切ったこのクラスは本当にすごいと、みんなを誇らしく思いました。このような経験は現地校では味わえません。

六年の時の担任の先生が「中等部へ行ったら学校がもっと楽しくなるよ。」とおっしゃっていましたが、本当にその通りでした。

現地校に月曜から金曜まで通い、さらに土曜日も補習校ということは、自分なりにかなりの努力をしてきたように思います。金曜の夜、大雪が降りますようにと願ったことは一度や二度ではありません。ごめんなさい。

私は長年継続してきたスポーツの大会が、土曜日に開催されることが多々あり、補習校を欠席しなくてはならない場面がありました。授業あるいは学校行事に参加できない時は、正直焦りますし場合によっては疎外感を感じることもありました。でも担任の先生が宿題の提出や、欠席届けについて忍耐強くご指導してくださったこと、励ましてくださったことに感謝しています。

時々英語が授業中に飛びかうことが多く、先生からは何度も「日本語をしゃべる機会があるのは自分の家族と補習校しかないのに、ここまで来てなぜ英語を話すの！？」と注意を受けました。私が一番怒られたのではないかと自負しています。

「自分には日本人の血が流れているんだ」ということについてのアイデンティティーを保つことができたのは補習校、先生たち、友達、そして日本語の読み書きがほとんど不可能な中、支えてくれた両親のおかげです。

この三年間で得た経験や友情は、私たちの心に深くきざまれたと思います。「少人数だからダメ」と感じるのではなく、「少人数だからこそ、より沢山のものを得ることができた」と感じる選択をした自分たちに、心から拍手を送りたいと思います。助け合いながら過ごした日々は、他では得られない特別な思い出です。補習校で学んだことや築いた絆は、これからも私たちを支えてくれるでしょう。

私は、この四月から高等部で生徒会副会長として、学校生活を出発します。今までは、「学級」の一員として活動してきましたが、これからは「学校」の一員ということを見据えて行動していかなくてはならないと痛感しています。今日は中等部卒業という一つの区切りですが、私たちの成長はまだまだ続きます。これからも、ずっと頑張り続ける自分でありたいと思います。

ありがとうございました。

大きく羽ばたけ！卒業証書授与式を挙行

NY 日本人学校

3/27/2025

ニューヨーク日本人学校（コネティカット州グリニッチ、岡田雅彦校長）は 3 日、初等部第 50 回、中等部第 48 回の卒業証書授与式を行った。初等部 10 人、中等部 9 人の児童生徒が卒業の日を迎えた。

澄んだ青空の下で行われた卒業式では、校長先生から一人一人に卒業証書が手渡された。担任の呼名に大きな声で返事をする姿や証書を受け取る姿は、卒業生として大変立派なものだった。卒業生たちは、来賓や校長先生からの祝辞や式辞、在校生からの送辞や合唱に耳を傾けながら、卒業の重み改めて実感しているようだった。

6 年生の「門出の言葉」では、これまでの学校生活の集大成として一人一人が呼びかけを行った。1 年間を振り返り、在校生やお世話になった先生、立派に育ててくれた保護者への感謝の言葉を力強く述べた。10 人が心を一つにして、合唱曲「あなたにありがとう」を歌い、未来への希望と勇気を込めた。

9 年生は受験で多くの生徒が一時帰国をしていたが 9 人全員が集まり式に臨んだ。全員の思いを胸に代表生徒が答辞を読み、友達や先生、保護者など多くの人や行事との関わりを通して成長できたこと、これからも夢や希望に向かって努力していくと力強く誓った。クラス全員で歌った「3 月 9 日」では、別れの寂しさとこれからの人生への前向きな思いを表した。歌声が流れると、会場全体が温かく感動的な雰囲気に包まれた。

これから新たな道へ進む卒業生。それぞれの夢や目標に向かって大きく羽ばたいてくれることを願っている。（情報・写真提供：ニューヨーク日本人学校）

門出の言葉を述べる 6 年生。
堂々とした姿が印象的だった

校長先生から一人一人に卒業証書を授与

体感！実感！はらぺこあおむし

NY 育英学園フレンズアカデミーたんぽぽ幼稚園

3/28/2025

フレンズアカデミーたんぽぽ幼稚園（マンハッタン、笠間将平ディレクター）は 13 日、生活発表会を開催した。

生活発表会は、子どもたちが 1 年間の成長を発表し、保護者と共にその歩みを振り返るのを目的に 1 年に 1 度、行われている。今回のテーマは、エリック・カール作の絵本「はらぺこあおむし」。子どもたちが、はらぺこあおむしにちなんだ歌や演劇を披露した。

子どもたちは「あおむし」になりきり、食べ物の穴をくぐり抜けたり、リズムに合わせて元気いっぱいに歌ったりと、笑顔あふれるパフォーマンスを展開。保護者が温かく見守る中、子どもたちは 1 年間の成長を存分に発揮した。発表会の終わりには子どもたちが幼虫から大切に育てた蝶を園舎前で放ち、感動のクライマックスを迎えた。

毎日観察を重ね、幼虫の世話をしながら、成長の過程を間近で体験してきた子どもたち。蛹から美しい蝶へと変わる姿は、まるで自分たちの成長を映し出しているかのようだった。蝶を放つ際には、「またね！」と手を振る子もいれば、別れを惜しんで涙ぐむ子もいた。生き物を育てることで、命の尊さや別れの大切さを学ぶ貴重な経験となった。

締めくくりには、子どもたちの 1 年間の歩みをまとめたスライドショーを上映。保護者たちは「こんなに成長したなんて」と改めてわが子の成長を喜んでいた。子どもたちが前日に焼き上げたクッキーも振る舞われ、「おいしいね！」「よくできてるね」の声とともに会を終了した。（情報・写真提供：NY 育英学園フレンズアカデミーたんぽぽ幼稚園）

あおむしの動きって、どんなかな？

蝶とのお別れは、さみしいね

ひな祭りで笑顔弾ける

NY 育英学園フレンズアカデミー保育支援広場「ぽっぽ」 3/28/2025

NY 育英学園フレンズアカデミー保育支援広場「ぽっぽ」は 3 日、春の訪れを祝うひな祭りのイベントを開催した。当日は 20 人を超える親子が集まり、日本の伝統文化を楽しんだ。

会場には、ニューヨークではなかなか見ることのできない七段飾りのひな人形が飾られ、参加者はその美しさに見入っていた。ひなあられを味わいながら、「まるで日本にいるみたい！」と感動する保護者の声も聞かれた。

製作活動では、子どもたちが自分だけのひな人形作りに挑戦。色とりどりの折り紙やシールを使いながら、世界に一つだけの作品を完成させた。また、保育者による紙芝居の読み聞かせでは、子どもたちは真剣に物語の世界に引き込まれていた。保護者たちはニューヨークでの子育てについて情報を交換し合ったり、悩みを相談し合ったりと、和やかな雰囲気の中で交流を深めた。（情報・写真提供：NY 育英学園フレンズアカデミー保育支援広場「ぽっぽ」）

親子でひな人形作りに挑戦。ぬり絵は楽しいね

フリータイムでは遊具を使って楽しくお遊び

涙涙の小学部卒業式

NY 育英学園全日制小学部

3/28/2025

ニューヨーク育英学園全日制部門（ニュージャージー州イングルウッドクリフス、岡本徹学園長）は７日、小学部の卒業式を挙行した。

卒業生３人の門出を祝い、会場には全校生が描いた卒業生の似顔絵が壁一面に飾られ、温かさがあふれる中での式となった。卒業に際し岡本学園長は「この学園で学び、体験したことを生かし人間として大きく成長していってほしい」と激励。式が始まって早々、感極まって泣き出してしまう卒業生や教員、在校生も多く、卒業生や育英学園に対する想いの深さがうかがえた。また、涙で言葉がつまる卒業生がいても、静かに見守る在校生の姿が印象的だった。６年生が、学園の行事で楽しい出し物を多数準備してくれたこと、休み時間には一緒に遊んでくれたことを思い出していたのだろう。

式の最後は卒業生が「旅立ちの言葉」を披露した。学園でのさまざまな思い出や保護者、教職員への感謝の気持ちを力強く述べ、「支えてくれる人への感謝を忘れず、誰かの支えになる立派な人間になります」と誓った。

卒業生や保護者からは「大好きな育英学園を卒業できて良かった」「育英学園で、子どもがどれだけ慕われて大切にされていたのかが分かりました。今までご指導ありがとうございました」と涙の中にも感謝の言葉が相次ぎ、教職員も晴れやかな表情だった。

「卒業後の進路はそれぞれ違いますが、どれだけ遠くに離れても、いつまでも応援しています！いつまでも『育英ファミリー』ですよ！（教職員一同）」

15、16 日には育英サタデースクール、ニュージャージー、マンハッタン、ポートワシントン各校とサンデースクールの卒園・卒業式が行われた。（情報・写真提供：ニューヨーク育英学園）

岡本園長から卒業証書を受け取る園児

エデュサン
edu sun

2. NY 教育関連ニュース

NEW YORK EDUCATION NEWS

写真はイメージ（Glenn Carstens-Peters / Unsplash）

NY 市公立校生徒、3 分の 1 以上が不登校

バッファローでは 62%が常習的に欠席

3/12/2025

保守系シンクタンクのマンハッタン政策研究所が 6 日発表した報告書によれば、ニューヨーク市の公立校に通う生徒 90 万人の約 35%にあたる 30 万人が、不登校の状態にあるという。同研究所は、ニューヨーク州が全米で最も多額の予算を教育に投入しているにもかかわらず、同州の生徒の数学と読解力のテストスコアが依然として平凡な水準にとどまっているのは不登校も原因の一つだと指摘している。ニューヨークポストが同日、伝えた。

不登校とみなされる、または年間 180 日の登校日のうち 10 日以上欠席した、市の幼稚園から高校 3 年生までの生徒の割合は、パンデミック前の 2018 ～ 19 学年度の 26.5% から 23 ～ 24 学年度には 34.8% に急増していた。ニューヨーク州北部の学区での増加はさらに深刻で、バッファローでは 41% から 62.2% に、ロチェスターでは 44.7% から 59.2% に、シラキュースでは 34.7% から 46.8% に急上昇していた。オールバニだけは唯一、37.8% から 31.8% に減少していた。

報告書は、生徒の不登校が急増した要因として、ここ数年間で登校に関する保護者の意識が低くなったこと、また、州の不登校を減らす取り組みが非効率的であることの 2 点を挙げた。加えて、州教育局がこのほど、各学区の成績を評価する指標から「出席率」を除外したことを「不登校を軽視する決定」として懸念を示している。

ワシントン D.C. にある米教育省（photo: ajay_suresh / https://www.flickr.com/photos/ajay_suresh/）

学生ローンの行方に混乱と不安

教育省廃止へ大統領令署名

3/21/2025

トランプ大統領が教育省を廃止する大統領令に署名したことで、1兆7000億ドルの学生ローンの行方を巡り、混乱と不安が広がっている。ウォール・ストリート・ジャーナルが20日、伝えた。

連邦政府による学生ローン（FSA）の対象は大学生。現在約4500万人が借りている。申し込みの受付、支給、返済や返済猶予など、管理しているのは教育省だ。教育省廃止となれば、その業務を財務省や中小企業庁に移管する可能性がある。ローンの条件等は変更になることはない。返済義務は継続する。しかし、ブルックリン在住のパーフォーマーで学生ローンの残高が10万ドルというオリビア・ハーディーさん（26）は「貸し手が消滅すれば、ローンも消えるはず」と主張。混乱が生じている。また、返済業務を委託しているサービス会社との契約も変更されることになる。その際、プロセスの遅延などが生じる恐れがある。

トランプ政権の政策アドバイザー、保守派ヘリテージ財団のプロジェクト25は、学生ローンの民営化を提唱している。民営化されれば、審査は厳しくなり、金利も上がる可能性がある。この1月にリバティー大学神学部で勉強を始めたデイビッド・テイラーさん（39）は1学期に2500ドルのFSAを利用する。「もし金利が上がれば、勉強を続けることはできない」と危惧している。

バイデン政権下の低所得者優遇措置の実施も不明だ。連邦裁判所は一時的な実施差し止めを認め、教育省のホームページからも申し込みプロセスが削除されたままだ。学生ローンのコンサルタントは、返済サービス会社からのメールや書簡に常に注意することはもちろんだが、最新の連絡先を知らせておくこと、返済状況を独自に追跡するなど努力が必要だとアドバイスしている。

ハーバード大学（photo: Somesh Kesarla Suresh / Unsplash）

ハーバード大学、経済的支援拡大

中流家庭の学生も授業料無料の対象に

3/24/2025

ハーバード大学は 17 日、来学年度から学生への経済的支援を大幅に拡大すると発表した。同大学では年間所得が一定額以下の家庭の学生の授業料などを無償化する取り組みを実施しているが、支援の対象となる所得の基準額を引き上げ、より多くの学生がハーバード大学に入学できるようにする。同大学の公式ニュースサイト、ハーバードガゼット（The Harvard Gazette）が 17 日、伝えた。

2004 年から始まったハーバード学資援助イニシアティブは当初、年間所得 4 万ドル以下の家庭の学生を対象に、授業料、食費、および住居費を全額負担していたが、同基準額は 06 年に 6 万ドルに、23 年には 8 万 5000 ドルに引き上げられていた。

2025 ～ 26 学年度からは、年間所得 10 万ドル以下の家庭の学生は授業料、食費、住居費、健康保険、交通費など全ての費用が無料となる。さらに、1 年目に 2000 ドルのスタートアップ助成金、3 年目に大学卒業後の移行を支援するための 2000 ドルのローンチ助成金も支給。年間所得 20 万ドル以下の家庭の学生は授業料が免除となり、経済状況に応じて、その他の費用をカバーする追加的支援も受けられる。また、年間所得 20 万ドルを超える家庭の学生の多くにも、状況に応じて支援を提供する。この拡大により、米国の家庭の約 86％が、同大学の学資援助の対象となる。

コロンビア大学（photo: Chenyu Guan / Unsplash）

コロンビア大、政権側に譲歩

助成金 4 億ドルの凍結解除を求め

3/25/2025

親パレスチナ派の学生による反イスラエル抗議活動の拠点となったコロンビア大学は 21 日、トランプ政権による助成金 4 億ドルの凍結解除を求めて政治的抗議活動に対する規則とセキュリティ慣行の全面的な見直しに同意した。これに対し多くの教授や学生は、政権に対する見返り（降参）であると反発。一方、保守派の批評家たちは、アイビーリーグでの「遅すぎた正義の是正」として歓迎している。今回の譲歩は、学問と言論の自由における重大な転換点とみなされている。ニューヨークタイムズが 22 日、伝えた。

コロンビア大学の暫定学長であるカトリーナ・A・アームストロング博士がキャンパス宛てに送った書簡によれば、政権の要求に応えて同大学は反ユダヤ主義の公式定義を採用し、逮捕権限を持つ学内治安部隊を雇用し、中東・南アジア・アフリカ研究学部を上級副学長の監督下に置くことを約束。しかし、トランプ政権は政権発足以来、精査を開始したコロンビア大学やハワイ大学、ハーバード大学など数十校に対して、他にどのような譲歩を求める可能性があるかについてを公にしておらず、政権側がコロンビア大学の申し出を受諾するかは不明。同大学の理事会は、政府との協議を通じて「コロンビア主導」の改革案を提示したと釈明。「コロンビア大学の学術的卓越性、自由な探究、深く根付いた表現の自由という揺るぎない原則を守ることに専念している」と主張している。

保守系シンクタンク、マンハッタン研究所の上級研究員で活動家のクリストファー・ルフォ氏は発表を受けて SNS に「コロンビア大学が折れたことで、他の大学も追随するだろう」と、さらに「これは始まりに過ぎない」と書き込んだ。

全米教授権利擁護団体アメリカ大学教授協会のトッド・ウォルフソン会長は「1950 年代にマッカーシー上院議員が共産主義者を追放（赤狩り）して以来の、学問と言論の自由に対する最大の侵害」と非難。プリンストン大学のクリストファー・L・アイスグルーバー学長はテレビのニュース番組で「学問の自由は大学の根本的な原則。大学がその点について譲歩することには懸念がある。一度譲歩してしまうと、その後も譲歩を続けざるを得なくなるからだ」と語った。

アイビーリーグの一つ、ペンシルベニア大学。キャンパス内のローカストウォーク（photo: ajay_suresh / https://www.flickr.com/people/83136374@N05）

トランプ政権の介入

アメリカの「知」揺るがす脅威に

3/26/2025

アメリカの大学は今、トランプ大統領の再戦により大きな転換点を迎えている。高等教育関係者の多くは、学術界を己の意のままにコントロールしようとするトランプ氏の野望が、アメリカの研究と科学におけるリーダーシップを失わせるのではないかと懸念している。ニューヨークタイムズが 20 日、伝えた。

ハマスがイスラエルを攻撃する 3 日前の 2023 年 10 月、コロンビア大学のネマト・シャフィク新学長は「その時代における偉大な議論を踏まえた厳格な思想家。社会を変革するような画期的な研究を行う研究者。大学の使命を大学の門をはるかに越えたところまで広げる大学が必要」と説いた。17 か月後、シャフィク氏は去り、トランプ氏は全く異なる答えを出している。

トランプ氏は「西洋文明の擁護」「労働力育成」「急進左派からの奪還」を掲げ、抗議活動や一部研究への資金提供を制限し、大学の自由を揺るがしている。　コロンビア大学では 4 億ドルの助成金と契約が打ち切られた他、他大学でも研究所の閉鎖や人員削減が進行。ジョンズ・ホプキンス大学は先週、米国および海外で 2000 人以上の雇用を削減すると発表した。これは同校史上最大の解雇数となる。トランプ氏の母校ペンシルベニア大学は、トランスジェンダーの女性が女子水泳チームで競技することを認めたことを理由に、トランプ政権が同大学への約 1 億 7500 万ドルの資金援助を一時停止すると発表する前に新規採用の凍結を発表している。イリノイ大学では、連邦政府の資金援助を受けていた大豆イノベーション研究所が来月閉鎖される予定だ。同大学アーバナ・シャンペーン校の学長、ロバート・J・ジョーンズ博士は、インシュリンの生産から人工知能に至るまで、あらゆる研究が最終的に衰退し、大学が「公共の利益」と呼ぶものを推進する能力が損なわれるのではないかと懸念する。大学側は道徳的権威や教育の理想を訴えるが、政権との対話は困難を極めている。

ニューヨークタイムズは、高等教育の目的をめぐるこの衝突の結果は、今後 1 世代以上にわたってアメリカ文化を形成することになるだろうと予測。大統領がその野望を実現すれば、保守的な州やリベラルな州の公立・私立を問わず多くのアメリカの大学が空洞化し、ただの高等学校のようになりかねないと指摘する。さらには、「アメリカの大学が持つ国際的な影響力や研究力が後退し、国家全体の文化と技術の発展に深刻な影響を及ぼす可能性がある」と警告している。

写真はイメージ（photo: Unsplash / Thiago Cerqueira）

デイケア利用補助バウチャー消滅か

追加資金 10 億ドルが必要

3/27/2025

ニューヨーク市でデイケア費用が高騰する中、施設の利用が無料または割引となる、市児童福祉局（ACS）発行の低所得者向けチャイルドケアバウチャーが、消滅の危機に直面している。ニューヨークタイムズが 24 日、伝えた。

市監査官によると、昨年、保育施設の利用に支払われた費用は平均 2 万 6000 ドルで、2019 年から 43% 増加。幼い子どもを持つ共働き家庭には大きな負担だ。保育費を負担できない場合、仕事を続けるか子どもと家にいるかの選択を迫られる。そんな家庭にとって命綱ともいえるバウチャーの利用者は、先月時点で 6 万 2000 人以上。この制度を継続するにはニューヨーク州からの追加資金として 10 億ドルが必要だが、4 月 1 日の期限が迫るにもかかわらず、知事と州議会はまだ承認していない。

1 月に発表されたホークル知事の予算案にも 3 月に発表された州議会の予算案にも、保育補助への追加資金は含まれていなかった。追加の資金が得られなければ、毎年更新が必要なバウチャー更新時に毎月 4000 ～ 7000 人が継続できなくなる可能性があり、今後 1 年間に 6 万人以上の子育て世帯がバウチャーを失う恐れがあるという。

ニューヨークで女性起業家として活躍する徳重真梨子さん

「計画や目標は常にビジュアル化、とにかくやってみる」

ニューヨークで活躍する女性起業家・徳重真梨子さん × 日本の高校生が対談

3/26/2025

グローバルに活躍するビジネスリーダーの育成に力を入れる「横浜市立南高等学校」のスーパーグローバルハイスクール事業。今回は 6 名の生徒がニューヨークを訪れ、国連本部やコロンビア大学、在ニューヨーク日本国総領事館などを訪問。この街で活躍する企業家の話を聞く機会もあった。

今回デイリーサン・ニューヨークが取材をしたのは、6 名の生徒、そして同じく横浜出身で、ニューヨークで女性起業家として飛躍する徳重真梨子さんとの対談。「海外への漠然とした興味はあるが、何から始めたらいいかわからない」そんな悩める生徒たちを前に、ガッツと緻密な計画力で自らの道を切り拓いた徳重さんから、貴重なレクチャーが行われた。

◆「行動しないと何も始まらない」

日本のギフトやファッション、雑貨、ライフスタイル製品のホールセールビジネスをサポート、北米初の日本商材に特化した展示会「DEKO BOKO」を主催する徳重さん。「人と話すことが好き」「ファッションが好き」という特性が今の仕事につながっているといい、日本にいたときから「舞台衣装一筋」な日々を送ってきた。大手電気メーカーに勤めていたお父さんの影響で海外に興味を持ち始め、学生時代は服飾の専門学校に通い衣装作りを学ぶ。19 歳の時に語学留学で訪れたニューヨークをきっかけに、「必ずここで仕事がしたい」と “10 年計画 ” を立て、27 歳のときに文化庁から新進芸術家海外研修制度を利用して、現地の衣装製作会社でインターンを開始した。

「横浜市立南高等学校」の生徒たちと徳重真梨子さん

学生にアドバイスを伝える徳重さん

将来に不安を抱える学、質問には丁寧に答える徳重さん

扱う衣装はブロードウェイや名作「Radio City Christmas Spectacular」のコスチュームなど、本場のエンタメ最前線の仕事で、言語はもちろん全て英語。「最初は家に帰って泣く日が続いたりしていましたが、行動しないと向こうから何も入ってこないので、できないながらにも『負けないぞ』というやる気、熱意を持って取り組んでいましたね。飛び込んでみたり、最初の一歩は怖いけれど、やらないよりはやった方がいい。とにかくやってみる」

◆「計画通りに行かなくても、軌道修正をしてもいい」

その後、アーティストビザを取得し、正式に就職。順調にキャリアを積んでいく中で、コロナ禍に突入。その時に感じた燃え尽き症候群などをきっかけに、人生の軌道変更を試み、たまたま声がかかったジュエリーの卸売業を手伝うようになったという。

「計画や目標は常にビジュアル化して、なりたい自分を明確に。そしてその都度記録をして、後で振りかえることができるようにする。でもすべて計画通りに行かなくても、軌道修正をしてもいい。私もたくさん軌道修正したし、失敗もしてきたから。でも迷ったときのために、アドバイスをくれるメンターを持っておくのは大事だと思っています」

「営業」という面が徳重さんの中にプラスされ、さまざまな展示会でアメリカを飛び回る中で、日本の製品を代理でアメリカに広める「日本からの需要」にも気づいたという。それが今の事業「ノース・レーン・インターナショナル」に繋がり、日本のクリエイターとアメリカにおける”架け橋”となった。

「アメリカに来て約 20 年が経ちますが、自分の人生が好きだし、これからも人生の価値は自分で作るものだと思っています。このように私自身の経験をお話するのは今回が初めてでしたが、みなさんには頑張ってもらいたいですし、私もパワーをもらえました」

徳重さんの柔らかくも、野心に溢れたレクチャーに生徒たちは始終メモを取りながら、時には深く頷き、熱心に聞き入っていた。

取材・文・写真／ナガタミユ

supported by

edu sun